懐かしい未来新聞

発行：甲賀市
地域共生社会推進課
連絡先 内線1356
0748-69-2155

本号の紙面　災害派遣特集
★保健師等チーム避難所支援
★災害ボランティアセンター
★DWAT
★被災建築物応急危険度判定

避難所支援から学ぶ 行政の受援力・連帯

派遣初日は、長崎市と一緒でした。

長期化する避難所生活 被災者支援のありかたとは

1.1 能登激震

滋賀県は、発災直後1月4日から石川県能登町への支援を稼働し、2月5日からは、金沢市内の輪島市南志見地区から避難されている1.5次避難所へ保健師等チーム（3人体制）の支援活動をしてスタートしました。

甲賀市からも、滋賀県第6班の保健師等チームとして、2月29日から3月5日まで、県職員とともに支援に参加しました。

災害は、他人事ではありません。短い支援活動でしたが我が市の避難所運営や健康危機管理に活かすため、肌で感じたことを報告します。

輪島市の状況

2006年　輪島市と満全町　合併
輪島市の人口　約25,000人　高齢化率　46%（2020年）

写真：避難者より提供

段ボールベットが置かれた居室

カーテンで仕切られた体育館

	滋賀県DHEAT	滋賀県保健師等チーム
業務内容	対人保健分野におけるマネジメント業務 関係機関との連絡調整 被災地の健康課題のアセスメント 被災地市町村の保健活動の評価、支援 保健活動計画の立案 派遣保健師の受け入れ調整	被災者の健康チェック・健康相談 避難所の衛生対策 現場での、プレイヤー業務
期間場所	2024年1月5日～1月24日 能登北部保健所 1月25日～2月1日　輪島市 1班が7日間で、4つの班でリレーし支援	金沢市内の8つの避難所のうち1つの避難所 2024年2月4日～3月31日(予定) 1班が6日間で11の班でリレーし支援
構成メンバー	医師1人、保健師1～2人、ロジ1人	保健師2人（保健所保健師、市町保健師）ロジ1人

保健師等チーム派遣の前にはDHEATとして、石川県の保健所や能登市に入り、被災地の保健行政への受援支援（健康課題のアセスメント、派遣保健師の受け入れ調整、保健活動の立案）をされています。

1.5次避難所運営は行政職員がメイン

金沢市では、1月9日から8つの1.5次避難所を開設されており、市の正規職員がローテーションで、避難所運営や食材提供などをされています。

避難所運営は、福祉政策部局が主管で、避難所ごとに運営マニュアルが作られていて、24時間体制で、全職員が交代で夜勤をされていました。

滋賀県チームと一緒に、高知県チームが健康管理として関わり、室内消毒・燃料補給・換気等の環境整備などは宮城県仙台市の4名の職員が従事されていました。

担当した額谷体育館と鶴寿園（福祉センター）の避難者は、体育館に70名、鶴寿園に18名と開設当初からは半分くらいに減っていました。

なかでも、滋賀県保健師チームは、複数の自治体の医療専門職の連絡調整、統括的な役割と個々の健康相談や健康チェック、避難所の感染症対策のプレイヤーとしての役割がありました。

健康管理は、傾聴することを心がけました

避難所の悩みは「自由」と「やること」のなさ

避難所生活も2か月を迎えている被災者の生活は、カーテンレールや衝立だけの仕切りの狭い家族スペース、一日の流れが決められていて、入浴や外出も申請や予約をしなければならない制約、そしてこれまではやってきた田畑や家事などの「やることがない」ことがいちばんの辛さであると話されました。

また、今後のことや輪島市の南志見地区の被害状況を聞いていくと、輪島は第二次世界大戦の空襲が少なかったことと高齢化のために古い家屋が多いことから、家屋の全壊、半壊、が大半を占める話を聞きました。

70歳代の男性は、「精魂込めてつくり育てた田畑や家屋が、あっという間にひどいことになった、もうカネもないから輪島に戻ることを諦めたが、やっぱりあきらめられない」と損傷に対して落胆されたり、60歳代女性も「この先どうなっていくのか考えると眠れない」と不安やストレスを吐露されていました。

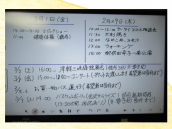
二次健康被害を最少にすること

うつやストレスが長引くと、脳血管疾患や心疾患、感染症にかかりやすくなり、災害関連死のリスクが高くなります。

専門職が定期的な訪室を行い健康管理を行い、心身の不調を未然に防いだり早期発見、早期医療へのつなぎ役として、避難所スタッフの連携が重要となりました。また、避難所生活を送る中で顔見知りのみんなが声を掛け合いながら互いを気遣われる様子は、「能登は優しや」の言葉通りでした。

換気時間提示

運動不足解消・体操の時間


本日の予定掲示

編み物教室

避難所での工夫あれこれ

民間さんから炊き出し

日替わりでの演芸

換気消毒の環境整備

朝夕のミーティング

企業から運動靴支給

ペットの同伴避難

毎日の訪室

※懐かしい未来とは、これまで古い価値観として捨ててきたものの中に、実はこれからの暮らしに必要な大切なものがあったのではないかという気づきから使われはじめた言葉です。

文責：甲賀市役所　地域共生社会推進課　Ryuoh Maki

DWATや災害ボランティアセンター、応急危険度判定等の協力支援/現場体験を甲賀市の備えに活かしていこう！

甲賀市役所内でも、発災直後から滋賀県の要請を受け、建設部を中心に能登地方への災害支援に支援活動を行っています。また、民間法人においてもさまざまな形で支援に出向いています。一部を紹介します。大切なことは、この支援活動を学びとして甲賀市の備えに生かしていくことです。

被災建築物応急危険度判定　1/12～1/16

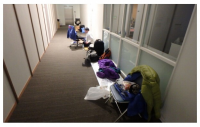
建設部住宅建築課　井原徹　係長
岡田陽介　係長

県庁職員とともに、地震により倒壊した家屋の危険度判定調査業務。能登町松波地区、珠洲市が判定地区でした。強い余震が続く中、地盤の隆起や液状化により完全に倒壊している家屋を目の当たりにしました。

倒壊した家屋

「危険」「要注意」「調査済」シート

雪の中、1軒ずつ危険度判定している様子


余震と防災無線が鳴る中役場廊下で事務仕事、就寝

災害時の活動は、肉体的にも精神的にも休める場所が必要です。
甲賀市の場合、市役所と甲賀土木事務所が迅速に確認できるようなマニュアルがあれば良いと思います。
各業務のオペレーションは、国・県の支援チームが主導されますが、市は受入場所を迅速に提供することが重要で、災害時は状況が刻々と変化するので、訓練の際には、各種チームの役割分担や場所の想定をしながら実施する必要があります。
実践で身に付く知識や経験は、本番での冷静につながります。甲賀市を担う職員に被災地支援を経験してほしいと思います。

経験に勝るものなし/積極的な被災地現場経験を

ボランティアを笑顔と感謝でお出迎え 七尾市　災害ボランティアセンター

甲賀市社会福祉協議会　地域福祉課　大谷喜久　課長

石川県七尾市では、1月10日に七尾市文化ホールに災害ボランティアセンターを設置し、七尾市内の方や県のボランティアバスを通じた災害ボランティア募集をしています（令和6年3月現在）。一日の災害ボランティア受け入れ人数は40人～80人程度。約20件のニーズをマッチングしボランティアを派遣しています。交通手段が必要なため、送迎ボランティアが現地までボランティアを送迎しています。

主なニーズは地震で被害を受けた住宅の災害廃棄物（ゴミとは言わない）運搬の手伝いや、荷物の片づけ、引っ越しの手伝い（現時点では、七尾市内の引っ越しに限る）などです。

七尾市災害ボランティアセンターの統計データでは、一人暮らし高齢者、高齢者世帯のニーズが多く、家族や地域に頼る人がないまたは地域全体が被災して頼る先がない方が多いのが特徴です。今後、地域コミュニティーの復興に向けて、災害ボランティアの活躍と共に地域のつながりや互助の力がますます重要になると考えます。被災地の一日も早い復興を願うとともに、今私たちができることを実行に移していくことが重要だと感じました。

【七尾市の状況】
人口48,264人　世帯数21,766世帯
【災害による被害】
火災被害2件　住宅被害（半壊、全壊、一部損壊）10,900件
＊世帯の約半数指定避難所38箇所
避難者数1,166名
（令和6年3月現在）

3/8～3/14　派遣活動

災害ボランティアセンターオリエンテーション

活動中の様子
災害廃棄物の分別

コーディネーターによる調整

被災地の様子

しがDWAT活動/石川県志賀町

社会福祉法人　絆敬会
田中俊之　理事長

しがDWATとは、災害時における、長期避難者の生活機能の低下や要介護度の重度化など二次被害防止のため、一般避難所で災害時要配慮者（高齢者や障がい者、子ども等）に対する福祉支援を行う専門職チームです。

昼間避難所におられるのは、仕事や自宅の片付けなどに行けない、高齢者や障がい者など、様々な福祉ニーズを抱えておられる方です。

精神疾患と糖尿病を持つ親子で、数匹の猫と一緒に避難しているため車中生活を余儀なくされる3人家族、認知症を患い避難所内の徘徊をする母親と精神疾患の兄の3人で生活する娘さんの3人家族。高齢夫婦で被災後、夫の体調が悪化、脳腫瘍が見つかり入院となるが、病院での問題行動により退院を迫られどこにも相談できずにいた妻など、深刻な医療・福祉の課題がありました。

避難所内では医療チームは保健師チームなど多くの支援があり、毎日情報共有会議が行われ、医療情報や福祉情報のニーズや課題について話し合われます。

しかし現場では情報共有されずトラブルとなったケースもありました。

日々ニーズの変化する災害現場において、医療・介護・福祉の情報共有について非常に大切であると改めて感じ、平時からの重層的支援体制の構築は急務です。

志賀町の富来（とぎ）地区にある活性化センターを拠点に活動
3階建の建物内、各部屋には仕切り高さ約1メートルの段ボールベッドで160名の被災者が　避難。
水道は徐々に復旧している状態で、断水が解消され次第自宅へ戻る方がおられる状態。食事は、朝食パン、昼食おにぎり、夜は冷たい弁当でした。

福祉と医療との連携が課題 平時からの重層的支援の大切さ

お昼の配食時の様子

段ボールによる仕切り